

6. 管内一地域における浮腫病の発生とその対策

玖珠家畜保健衛生所

○佐藤愛・松井英徳・足立高士・安部行倫

【はじめに】

豚の大腸菌症には敗血症、下痢、毒血症（浮腫病・脳脊髄血管症）などの型があり、なかでも浮腫病は小腸内で志賀毒素（以下Stx）を産生する志賀毒素産生性大腸菌（STEC）の増殖によって起こる一種の腸内毒血症で、経営上大きな損耗要因となっている。今回、管内で発生した浮腫病の概要と生菌剤の投与を中心とした対処方法、同発生地域の生産者を対象にした研修会を行い、一応の成果をみたので報告する。

【農場の概要および発生状況】

発生農場は、繁殖雌豚350頭規模の一貫経営。2009年6月中旬から離乳後約1ヶ月の元気・食欲があり比較的成長の良好な子豚が相次いで死亡した。臨床所見は眼瞼およびその周囲の浮腫・斜頸・運動失調など軽い神経症状を示し急死、または症状を示さず突然死する症例が多発したため病性鑑定依頼があった。

【材料および方法】

症状を示し死亡した離乳豚2頭を定法により細菌・ウイルス・病理学的検査を実施。分離された大腸菌のPCR検査を実施し、浮腫病特有の遺伝子解析を行った。また、過去に浮腫病の発生した農場を含め、本地域の養豚場の糞便検査を行い、発生農場とのSTECの保有調査を実施した。

【対策および指導】

発生農場に対して、浮腫病の特異的症状を説明するとともに、離乳豚房の消毒の徹底、浮腫病は抗生物質等の投与でSTECが崩壊する際に多量のstxを放出し、豚を死亡させることが知られているため、発症時の抗生物質の投与制限と生菌剤の投与を指導した。また、分離されたSTECの薬剤感受性試験で選択された抗生物質を離乳前の子豚に投与を指導した。さらに、本地域の生産者を対象に浮腫病を中心とした豚の大腸菌症についての研修会を実施した。

【結果】

病性鑑定を行った死亡豚の腸内容からSTEC特有遺伝子Stx2eおよびF18を有する大腸菌を分離した。薬剤感受性試験の結果ST合剤が有効であり、離乳前投与薬とした。また、各々の農場から分離したSTECの薬剤感受性試験の結果、農場ごとに浸潤しているSTECは由来が異なると思われた。

【まとめ】

分離されたSTECの薬剤感受性試験で選択された抗生物質の離乳前の子豚への投与や、生菌剤の長期の投与などの指導によって、発生豚は大きく減少したが、STECの抗生物質に対する耐性化を考慮すると、これからも発生を未然に防ぐために定期的な菌分離と薬剤感受性試験が必要と考えられる。